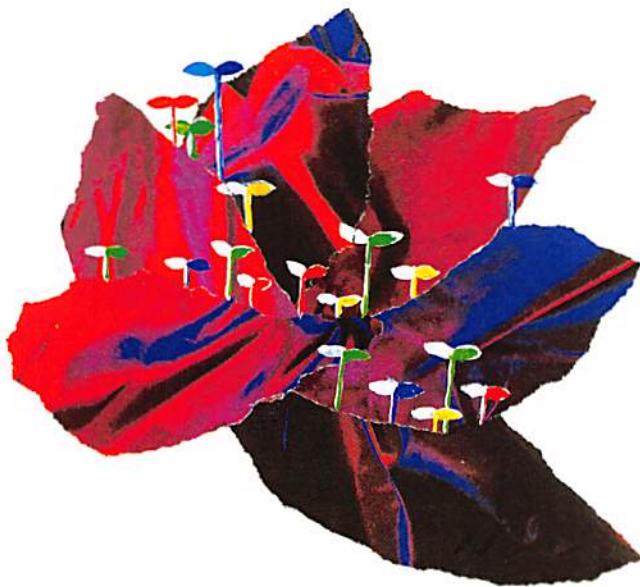


# 地中海

MARE MEDITERRANEUM

2022. 9



## 創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みんなおなじ氣持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。



北へ

光広 祥子

一九五一年生まれ。  
地中海入会時（一九八二年）、青嵐グループ。  
現在は、昂グループに所属。

北へと向かう早朝道の辺の沼の面に霧立ちのぼる

待つという時の長さ墓参へとまっすぐ駆ける県境を越ゆ

行き先の提案いつも友なりき次は倉敷 最後の約束

はじめての出合いのように奥つ城へ宍道湖のぞむ丘のなかもど

追うようにつきゆくように逝かれたる父と友の名刻まるる墓碑

出会いより五年の後の四十余年「生きたい」ということばがのこる

形見の帯の折りじわいつ着たの茶会で着たのと問うのみひとり

過ぎ去りし日日の輪郭くつきりとなりくる不思議がくあじさい咲く

紙製の赤カーネーション胸につけ通学の日におぼえしいたみ  
咲きながら大きく大きくなるあじさい長靴はきて幼子はゆく  
川沿いの道にあらたに並ぶ鉢トマト咲きそみひまわり芽吹く  
ひと鉢に間引きされつつ競いつつ育つひまわり今は四本  
演ずるも見るも掛け声子等の声満ちし日はあり『おおきなかぶ』  
幼子に伝えたくなるみどりの葉かがやきしろし夏日の日ざし  
店頭の笹竹三本短冊のねがいもとりどり葉のみえぬほど  
ふたりのくらしに合わぬサイズなり並ぶ西瓜を今日も横目に  
土砂降りをやり過(よ)さんと軒下に傘さしふたり時持て余す  
咲きそめしくちなしえらびかおりかぐマスクはずせば風にものりて  
ガード下くれば川べり夕つ方トマトの鳥除け風鈴がなる  
日をつむり虫の音をきく雨後の夜内なるわたしの音も重なる

# 作品 A

草刈十郎

睡蓮

・世

ウクライナの日々の映像戦争が春も命も奪ひゆくなり  
今はただ仰ぐだけなる山やまの思ひ出語る登山帽かな  
ふるさとの山々緑の駆け上るそれぞれ己の色保ちつ  
やつと歩き初めし幼子風船に引かるる如く歩みぬくなり  
こちらまでぼつとするよな難民の子どもの笑顔風蒸るなり  
さはやかにあまた咲きたる睡蓮の満開といふ静寂のあり  
茶摘女はお茶より珈琲飲むといふ話聞きつつ新茶飲みをり

國井節子

十津川

・春

今日一日十津川めざしてバスの旅ゆられゆられて巡礼の旅  
山峠のホタルブクロが風に舞ひ通る車にかるく会釈す  
十津川の奥の奥なる玉置山急なカーブを車で登りぬ  
足おもく杖をつきつ頂上の神社へ参るこれが最後と  
熊野から巡礼の道熱心な白装束の人等を乗せて  
奥駈けの道にピンクの笹百合のわづかな土にしか咲きをり  
山道の観の水は冷たくて五臓六腑に沁みわたりたり

喧せやすく補水怠れば熱中症われに迫りて令和四年夏  
三年ぶりこれが最後になるからと卒業七〇年目の七夕クラス会  
木造の校舎の窓に広がれる茜色の空 夢見し未来  
年を経ていま蘇る日々があり友と電話に声を弾ます  
コロナ波に籠りて夏解まつ吾に喧び咳き込む癖のつりぬ  
やつぱりと一呼吸して七夕の雨のクラス会欠席を言ふ  
笹の葉に五色の短冊戰巴み地球は背く美しくあれ

河野繁子

岩煙草

・雁

草しげり水は見えねど川べりの螢の宿は今年も営業  
一を引き二をひき引き算ばかりなる心のひだに添う山野草  
鉢のなかそんなに伸びてどうするの茶やさし岩煙草咲く  
十本の花茎のひて花咲かず軒下なれば日々水を欲る  
滝の音、水恋う花の根は浅く人家に生きて衰しみ分かつ  
野にあるは手をださぬとも頼いて植うるも罪と花に水やる  
梅雨入りの遅きしあわせ夏至の日の夕陽の沈む山頂を知る

小林能子

七夕

・羊

近藤栄昭

「暮れ六つ」

・虹

菊地栄子

愁い溢れて

・湾

上弦の月あわやかに浅草寺人影つみ香煙消えゆく

そうだよね確かにあつたよあのあたり髪にスカーフ飲み屋「暮れ六つ」  
浅草の飲み屋「暮れ六つ」灯が入り鐘撞堂を行き交う人ひと  
文屋らが無頼の顔してたばこ吸う生き生きしてくる街灯点りて  
灯台にほんやり点る暮れ六つに飲むか話すか競いはじまる  
染む煙しばたかせるが店の味耐えて慣れゆく世界のありぬ  
「暮れ六つ」でネタを育てて記事にする飲み屋なくなる鐘撞堂に

近藤芳仙

光の季節

・信

ふりこぼすアカシアの花まとひつつ車走らす蓼科の道

山はいま芽吹きのさかり枝ごとに薄黄緑の陽をすかしをり  
八峰越えしみいづる水キラキラと木本に映えつたりゆくなり  
ぬくもりし五月の森の息遣ひ水にゆたかな藻をなびかせて  
未だなれぬ鶯の声やはらく芽吹きうながしわたりありくも  
ゆきつけのイルボルトでは手にうちしフィットチーネにしたづみうつ  
このあをき地の営みを信じたしコロナウイルスの退きゆくことも

神田鉢子

旅行券

・大

北海道神宮祭の儀たち三年ぶりに初夏きたる

「あの日から」言いさしたままの背を見る触れば温き小さな背を

あの日とはどの日だろうかただ庭を見つめる人をみつめておりぬ

それぞれにあの日はありてあの日から三十五年と思う眩しく

傾いていく家に住む大地震のしばらく後から地はなだれゆく

身の内を巡るものあり歩くたびしゃらりしゃらりと音たてながら

何気なきメールのやりとり温かくわが身をつつむ梅雨の晴れ間を  
叶はざりし夫との旅よ黒部ダムが今も吾を呼ぶ旅行券褪せて  
三十年終しJTBの旅行券はたして今も有効なりや  
恐る恐る電話に確かむ旅行社の有効告ぐる声に安堵す  
一万円のナイストリップ十二枚いかに使はむ健やかな間に  
人影もまばらな寺の石段を上がりゆく眼にみどりしたたる  
木々の間を吹き抜くる風のびやかに透る野鳥の声の明るき  
何気なきメールのやりとり温かくわが身をつつむ梅雨の晴れ間を

木村文子

日々

・羊

札幌のあちさる線香臭のなく北欧風の窓によく合ふ

末期癌と宣告されし硬骨が受話器の底にこぼす憂国  
ともに行く話もありき、なないろの花の浮島礼文の夏に  
人の手の撫づれば枯れて散る花とレブンアツモリソウの孤独は  
明日の日の定めは知らず北辺の風にしたたるハマナスの赤  
ぼつねんと空のグラスを見つめをりもはや泣き得ぬ麦酒晏らせ  
耳ひとつ何處かに忘れて来し吾に今日氣まぐれの郭公が啼く

北山雪男

風にしたたる

・伊

春うらら庭辺の草のおちこちに蕾をふむ茎のいきおい  
遠ざかる人か近づく人なりや眼を凝らす新緑の道  
ベビーリーフ時きて六日目ひそとのこの世を伺う発芽のみどり  
手を取られバスを降りしが振り返り銀髪のひと一礼しおり  
幾度も母運ばれし救急車夕べ駆け来るをしばし見送る  
プランターに冬を越したるえんどうの一齊に咲くはジューングライド  
黒百合とまがうほどなりクリスマスローズのひとつ愁い溢れて

春うらら庭辺の草のおちこちに蕾をふむ茎のいきおい

遠ざかる人か近づく人なりや眼を凝らす新緑の道

ベビーリーフ時きて六日目ひそとのこの世を伺う発芽のみどり

## 坂上直美

夏の片付け

・天

篠原まり子

静けさ

・羊

あれもこれも捨てればとも楽になる　だが然てられぬあれこれみんな  
捨てんとしました元に戻す繰り返し懐かしき日の帰るにあらねど  
売ったとていかほどにもならぬガラクタの一つ一つが昔を語る  
捨てられぬもの一つは母遺す何枚もの布　麻・絹・木綿  
母遺す贊美歌ひらく　聞こえるオルガンの音細きソブラン  
願わくは狂女となりて彷徨わんキスゲ群れ咲くはてなき夏野  
リュウゲウに命のかけらあるという我らは遠き星の末裔

## 坂出裕子

飛行機雲

・洛

庭にいま咲いてゐるのは何の花　電話で聞きぬ外つ国の子が  
花の名を言へばおのづと目の前に浮かび来るらし庭の景色の  
砂浴びをしたる雀か庭の面にくぼみ残れり二つ、三つ、四つ  
どこまでも白く真つ直ぐ伸びてゆく飛行機雲に立ち尽くしをり  
ゆづくりと軽くほぐれてゆく雲の　やしさに似る白きただよひ  
ほんやりと飛行機雲を眺めり空にひととき我を忘れて  
仕事終へ家路をたどる人を乗せゆく飛行機か夜のじしまを

## 佐藤道子

時代

・甲

徒歩でゆく内科医眼科医閉院す九十三歳途方に暮れる

六十年の友の医院も閉ざるとふ我等の昭和は遙かになりぬ  
開封し書き直し又封印す老いの進むはまさびしきもの

事故ありし踏切り脇の地蔵尊赤き帽子を被りて小さし  
安曇野の水絶ゆることなく供へあり彼の地ゆかりの人祀るらし

踏切りを渡る朝々お早うと言ひゆく二体の地蔵尊に  
コロナより人目が怖い街の人夏の日盛りマスクが歩く

ブルーシート覆う「カズワン」抱くこと作業船「海進」夜明けの曳航  
点滅の青信号に急ぐなく赤信号は暫しの休息  
家時間長きがほどに肩に居る小鳥は私の体の一部  
人ならば同じ年なる生きものと共に時間の一日が有り  
ベランダに熟れたるトマト思い遣り笊一杯の安価さびしむ  
突然の友の訃報幾度か残り居るもの静けさは何  
熱きもの胸に籠もりて今一度録画に頼り「歌人の青春」

## 柴田登志恵

ブーチンの大

・天

投降の兵に伴ふ軍用犬ブーチンの犬とまみゆるならむや  
投降せしウクライナ兵の映像のその後を知らず紫陽花蒔し  
すでに飢餓始まるらしき穀物は渋に倉に満ち満ちをりしが  
紫陽花のたわわの白の花蕊に保護猫の三毛猫を待ち坐しぬ  
転倒にサイン点燈九十路母歩み初む薔薇色日常  
戦時下の小学生なりし母なれど戦争報道場の外なり  
うす音の紫陽花の間を揺れをりぬ園児の帽子太陽の色

## 鈴木結志

私史の章

・福

かな文字の流麗にして西行の時代色持つ傑作を見る

桐箱をひらけば和泉式部の文字うつつに貴重永久に息づく  
書はわれの師とも育む永存を日光月光菩薩が守る

筆さばき書芸の一途われのみの日日の手習い心を鍛う  
エリザベス女王と生れ年同じわれはうた詠み日日いつくしむ

口手足五筆同時に書く空海の天技によくあやかりたきを  
いくさ飢えしぶとく生きて歎深き手に筆とりて私史の章かく

## 関根榮子 草いきれ

・埼

立ちこめる草いきれさえなつかしくマスクをはずして畠道を行く  
三白草の葉の一枚のみ白くなり最も早き梅雨明けとなる  
思い立ち軒先にする打ち水もたちまち乾く暮れとなりても  
朝靄に足元濡らし歩み行く胡瓜の黄花の咲える畠道  
夕暮れとなりて訪ねしこの辺り酔芙蓉咲く家のありしが  
探しいる星座みつからず隕石の何処へ落ちしや流星ひとつ  
スフィンクスの謎かけの答えの人間と村をつきつつ夫の言えり

## 関根和美 散歩道

・埼

立ち話するもされるも好まずば迂回してゆくわが散歩みち  
何の話してたのだろう日々母と歩みたる道にも思い出せず  
眸に汗ふきつつ休む老夫婦まぼろしのこと十年を経て  
空家から更地新築しばらくを行かざりし道に若きらの増ゆ  
ゆるゆると衰うる母と前後して勢い増す児の画像がのこる  
四半世紀に届くほどなり寡婦の母むかえ見送り老境に入る  
抱かぬまま乳呑児はいま駆けまわる幼な児となりわれに現わる

## 高尾恭子 夏の夜

・大

夏の夜をおどる瘦身もがきつ置きっぱなしの言葉をひろう  
ひと匙の氷金時しゃりしやりと「左衛門の休演つづく  
（残された）ではなくあなたに（おくれた）と起点をかえて今日を見ている  
麻の葉の藍の浴衣は捨てられぬ たった一度の天神祭

漂泊の行方さだめず茄子ひとつ炊いて事足る夕餉一膳  
つやつやの茄子の煮浸しつつましく今宵はパカラの小鉢に盛りぬ

再生のイニシエーションぶちぶちと筆笥の底の記憶をつぶす

## 高津砂千子 言葉の海

・風

調子者のわれに鉄槌下ろさるる五月の末の小雨降るあさ  
『方丈記』一冊持ちて入院す今のわたしにふさわしきかと  
立つまでにかくも頭を使いたり手の動きさえ二センチずつと  
骨折し五日日のあさベッドより自力で立ちて車イスに乗る  
眼られぬ夜は嘆かず歌を唄むことばの海を浮きつ沈みつ  
水無月の水きよらかに流れよと鮮やかさ増す若葉に向かう  
ゆうるりと飛びゆく白き鳥一羽みどりの山を背景にして

## 滝田靖子 スマホ

・新

一列に並んでバスを待つてゐる高校生らの必需品スマホ  
壮大な仮想空間現れてバス待つあはひをスマホのゲーム  
バスを待つ東の間バスに揺られるるしばし大事なスマホの時間  
スマホある日常を生きる若者に淘汰されていくわたしもやがて  
うつ向いてスマホ見てゐる昼下がり今日の命を無駄に使って  
郡山の歴史とふ本読み終へて手持ち無沙汰に診察を待つ  
初夏の緑さんざめく屋下がり憂きことは胸の底にしまへよ

## 竹下妙子 天の川

・霧

小夜ふけて煙らふごとく浮かぶ川天の川とは寂しき川か  
ま夜ふけて出でたる月の白じると吾が歛座は南中にあり  
稻妻の光れる中に浮かびける「田の神さあ」のおべへの紅し  
いなづまの光りて音の響く間に大粒の雨吾が裡ぬらす  
車窓より見渡す里山一面に青葉若葉のいま盛り上がる  
過ぎし日に一度ゆかむと思ひしがあまりに遠しかの散歩道  
夕ぐれの童話のごとき明るさに舌にかへりて来るものがあれ

田 土 成 彦 大姫ひ

・宙

中 島 央 子 子 鴨

・森

コンクリート大姫ひだと叫びたる姪の声は聞こえないけど  
侵入路不明なれども話題はいま現実に目の前を這ふ  
丹頂は地味に質素に身繕ひしてをり二つながら孤独に  
梟はときをり首をまはしつつ思索樂しむそのたたずまひ  
五人兄弟の末の一人が生き残るさびしさ安堵なひ交ぜにして  
マスクの下は伸び放題の無精髭これ剃れば何か良きことありや  
黒金の風鈴鳴れば台風はいましがた室戸の洋上を過ぐ

田 土 才 恵 ふく枝さん

・宙

中 島 義 雄 昼の眠り

・岡

みどりの風吹き抜けてゆく道の端にボイ捨てマスクの一ついろがる  
咲く花は五分こそよろし母の日の薔薇の紅窓辺に崩る  
冬衣仕舞ひし五月の雨寒し治療の予定を一日延ばせり  
河口よりゆたにたぬたに潮のぼる波間に子鷗の浮きつ沈みつ  
すり足に寄り来る老いか河川敷のあえかに青きあら草を踏む  
夕風に誘はれ歩みゆく土手に羽田へ下降の一機見送る  
衰ふる己が歩幅をはげまして夕焼けこやけの径を下りぬ

長病める夫を看取りし生前の間わりいくつに思いは巡る  
満中陰待たずあと追うように遡き藤の花房ゆれてふれあう  
子を成さず来し生涯を書に生きて夫を支えし君の在りし日  
唐突に死は訪れぬ人」とと思えぬ知らせ水無月の朝  
まさかの死わが胸うちにじんじんと一日をめぐる蒼くしづかに  
春の日のひかりのなかをやって来た大学生となりし顔して  
すっぽまーちょ食む音ひびかすたまゆらの若さまぶしむ男孫十八

玉 井 綾 子 價値観

・羊

永 塚 節 子 花は白

・銀

朝ぼらけ寝息のリズムに寝室を出て制汗剤スプレーを使う  
学校の提出書類の保護者欄 吾は夫の名を代筆しない  
子の答え「嫌」か「別に」の二択なり「どちらでもいい」は大いなる肯  
らしくない友多ければ見た目では決めつけられない価値観育つ  
笑いつづ俳句を裁断するテレビ見ていじめじゃんと子は判定す  
初キスのような顔して小六の男児がリップクリームを塗る  
コロナ禍に金魚すくいの三年なく水槽に水草の干からびる

忽然と逝ってしまったコロナ禍に会うは叶わず別れも言えず  
うつしえの変わらぬ笑顔に昨日今日明日へ続く朝のあいさつ  
梅雨時には白き花がよく似合うあじさいの白くちなしの白  
もやもやと続く梅雨空くちなしの際立つ白にふふむ哀しみ  
あじさいを愛てる気持ちのそがれゆく頗る番待ちの番号札に  
あじさいのとりどりの色統くなか白き一株孤高を保つ  
鎌倉の寺のなだりに見つけたりはや五分咲きのいわたばこの花

## 仲 西 正 子

命

・沖

## 浜 谷 久 子

白い花

・地

祖国復帰五十年なり島の空ながく居する梅雨前線  
祖国復帰記念式典さわわわわわわノール歌手の「さとうきび畑」  
コンクリートの壁に張り付きガジュマルの氣根のオブジェ語る歳月  
コンクリートの隙間に落ちて命強のド根性ガジュマル年輪やいかに  
朝夕をオオゴマダラを撫育する男捉えし黄金の蛹虫  
慰靈の日の真青の空へひらひらオオゴマダラの鎮魂のいろ  
オオゴマダラ慰靈の空へと放ちやり見上げる児らの目を燐らすな

## 白 子 れ い

梅雨明け

・洛

## 浜 本 美 美

空の藍

・夢

週一度温泉にゆく気分にて迎えの車にのりてお風呂へ  
雨ふらず梅雨とは名のみのこの暑さ地球は狂いはじめしならん  
青々とみどり葉茂らす樹々たちも雨求めいんに雨なく梅雨明け  
背丈まで伸びいし雑草刈られたり疏水辺の道ひろびるの感  
いつしかに白鷺一羽姿消し疏水に群るるは背黒せきれい  
紫陽花の大き花まり次々と咲きいて吾の歩みを誘う  
杖もたず両手ふりふり水上に浮かぶ木の葉と競いあいたり

## ば ぱ り ょ う こ

くちなし

・鹿

## 檜 垣 美 保 子

蝶

・昴

咲くことはもはやなかろう、さりながら慈しみたりくちなー樹  
黙したるままの数年の密約を吐露したる汝くちなー開花  
くちなーの言わず語らずの胸の裡代弁したるか水無月の吐息  
くちなーは花片八重を寄せあいて雨滴を受くる洗礼のこと  
兩女の庭にあじさい 泰山木くちなーの白と一色の寂  
花殻を摘みつつ迫る淋しさは言うべくもなく言うべくもなし  
指先に移り香残せるをいとおしむそのおゆびもて今宵の日記に

咲くことはもはやなかろう、さりながら慈しみたりくちなー樹  
黙したるままの数年の密約を吐露したる汝くちなー開花  
くちなーの言わず語らずの胸の裡代弁したるか水無月の吐息  
くちなーは花片八重を寄せあいて雨滴を受くる洗礼のこと  
兩女の庭にあじさい 泰山木くちなーの白と一色の寂  
花殻を摘みつつ迫る淋しさは言うべくもなく言うべくもなし  
指先に移り香残せるをいとおしむそのおゆびもて今宵の日記に

ささやかな予定の幾つかこなす日日夕暮れはただ汐引くよう  
やわらかな眼差しなして夕暮れの訪れてくるふたりの家に  
たわいない話をつなげて笑い合うふたりの暮らし孫らの巣立ち  
いつまでと覚束なくも日暮らしに身の守りをする足腰かばい  
昏迷を呼び寄せながら出来上がる人生ほどいてゆきたい晩成  
くる波に逆らい進んだ時もある百合のつぼみがふくらんでくる  
白い花咲き継ぐ庭の永良部ゆり紫陽花アナベルもうすぐ木槿

福田庸子 滑り観

・今

牧雄彦

西山・光明寺

・大

青葉間木木の息する水無月の香を届けたしウクライナの地に  
遠き日の弟の心につながれる「きつねのたなばたさま」に今も泣く我  
さびしいよさびしいよと日に幾度息子を恋へる老母の口  
滑り莫掃き溜め菊と地縛り等野菜畠を我がものとす  
真夏日を勢ひ猛く畠を占む滑り覓群茎赤と  
懷の深さもちたる先人に倣ひて滑り覓のお漫し作る  
うしろ手に組みて前屈みに歩みゆく同級生に我を見てゐる

藤田美智子 雲路

・新

忘れないこときつとあるのだらう「忘れた」を口癖になせる少女は  
雲路とふわれには見えぬものを知る鳥の眼の澄みるるならむ  
早鐘を怖れつつ聞きし日はとほく火の見櫓のほつそりと立つ  
不機嫌の理由を知りて何になるどしやぶりに路上を泥流れゆく  
返信のなき理由あれこれ思ひつつそのいくつかに少し傷つく  
黙深き君の守らむとするものを卓に積まれし書物にはかる  
湿りたる土を綿毛はめざすとふ風に吹かるるままと見ゆるに

藤森巳行 徐徐に近づく

・銀

コトコトと規則正しい音をさせ京浜東北荒川渡る

引き摺つた影が突然走り出し我との距離がどんどん聞く

コロナ禍も恐れることなしワクチンとマスク手洗ひ密を避けられれば  
令和四年今年は何といふ年だ親友相繼き笠山旅立つ

男だら辛い別れも声出さず心で泣いてさよなら告げる

君の頬なんてこんなに冷たいんだナイスショットの笑顔よ戻れ  
次々と見送る人が多くなり自分の番も徐徐に近づく

木の陰に墓は苔むし静かなり時折五月の風が吹き抜く  
豊かなる頬ふくらませにこやかな石地蔵二体を初夏の風振づ  
城葉の緑みどりに囲まる朝の御影堂は深閑として  
莊嚴なる御堂に行むこの時もウクライナで人は殺し合ひるむ  
しづかなる境内覆ふ城葉のみどりを浴びて立つ上人像  
城葉のみどり覆へる火葬所は法然上人荼毘のあととふ  
火葬所の前にそびゆる数百年生き來しイブキの樹靈に触れたり

松浦禎子 薪能

・羊

薪能大会委員長の齊藤氏三年ぶりなり杖のすがたで  
初夏の風きよらに流る平間寺まずは大師の尊像の前  
本殿の正面に設う能舞台日の暮れゆくを浮きたちて待つ  
大導師の法楽に始まる薪能袖ふくらみて目の前を過ぐ  
日の落ちて焚火のほの盛るとき重衡役の片鱗燃ゆる  
都へと引かれていやくその前夜直面なおも青白く坐す  
われの生き託するものをふとおもう盛る薪の火の粉を後に

松瀬トヨ子 歌集『沖縄』

・沖

鉢に咲くあじさいの藍さみだれを集めて群れて五月華やぐ  
ティケアへ明日着る服を調えて明日に続く花柄の毛布  
体内の捻子まくようによりハビリ室に自転車をこぐひたすらに滑ぐ  
届きたる山桃を食む昔ほど甘味覚えず兩多き年  
夜の氣をたっぷり吸いて朝の陽に新芽鋭き鉢のシンビジウム  
本棚に土筆のように付箋生え微笑む邑子師の歌集『沖縄』  
サンニンの鈴生りの実のひとつずつ弾けゆく間に秋の深まる

## 松 永 智 子 間

・風

## 三 好 聖 三 姪 妹

・伊

音のなき十階ビルの六階のひとくまに夜毎螢火ひとつ  
文月の闇をひととき飛びしのち位置定めともおほき螢火

螢火の青白くふたつ玄関の闇飛び交ふを夜毎さめ見る  
玄関の闇のひとくま音のなく夜毎ともあをき螢火

音はてし闇をひととき飛びしのち青白く点す螢火を見る  
夜毎きて玄関の闇縦横に飛びそれそれにともす螢火

昇降機の音の絶えたり闇を踏む人らの後に人の声なく  
音はてし闇をひととき飛びしのち青白く点す螢火を見る  
夜毎きて玄関の闇縦横に飛びそれそれにともす螢火

## 三 浦 好 博

大量殺人

・鉢

麦秋に青空これはあの国の国旗ぞ日々に命奪はれ  
破壊さる都市映されて破壊する側にと先制攻撃を言ふ

生き延びても一週間ぞ無いよりは富裕層が買ふ核シエルターよ  
戻せない戻れない気候変動よ次々世代への大量殺人

ふるさとに来て親しもよみちのくの訛る鳴ホードコインヨホー  
海見ゆる丘の公園駐車場掃除のゴミに避妊具混じる  
ママチャリをバチャリとして今日我はヤックスにマスク買ひに来たりぬ

## 宮 本 靖 彦

酷暑

・凌

猛暑朝胡瓜の網を高くする伸び上がる芽に黄花咲き継ぎ  
青空を斬るがに棕櫚の葉の泳き酷熱無為の日の傾きぬ

夕されば涼風入り来青空はなほ色深き酷暑長き日  
乱れ咲くアバカンサスに擬宝珠が庭に向き合ひ紫競ふ

老友に言ひし「歩け」の励ましを吾足痛め敵しと知りぬ  
ボビュリズムに搖るGセブンア・習の周到戦略にあやふさを見す

官僚がコロナ補償金騙る世となりて昭和の輝き更に遠のく  
官僚がコロナ補償金騙る世となりて昭和の輝き更に遠のく

炎天下身をよじりつつ死んでゆく蚯蚓をじつと見つめていたり

炎天下身をよじりつつ死んでゆく蚯蚓から体液はつか漏れてありたり

舗装路を渡り切れずに死んでいる蚯蚓はどれも千からびている

量水器の蓋を開ければダンゴ虫の白き骸が積もりていてたり

夏柑をもいで日陰に食べてある動かぬ雲の穴をみつめて

ヒメオウギ蔓延る上を大筒であけたるほどの穴を持つ雲  
猫たちが網戸を倒して脱走し一夜かぎりの野良を勤しむ

## 御 代 田 澄 江

国営ひたち海浜公園

・茨

銚子から小名浜までを見渡すと海浜公園の大観覧車乗る  
春霞爛引ける中端座なす筑波二峰遠く望めり

海晴るる東望めばクレーン車行きつ戻りつ土地拓きをり  
一枚の青き絨毯広げしかネモフィラの丘足下に麗し

苑巡る周遊バスも乗降の都度座席消毒コロナ下の世は  
風そよぐネモフィラの丘登りつつ人らも犬も笑み交ははすかと

レストランの青きカレーはスルーなしソフクリームの青きに憩ふ  
あずさ5号松本よりもそのままに大糸線の軌条を走る

新宿発きつちり八時あずさ5号の窓辺にゆられ大町への旅  
岩木山に桂月の歌碑見し日より信濃大町訪ひたき町に

あずさ5号の終点は南小谷にてわがチケットは信濃大町  
あずさ5号松本よりもそのままに大糸線の軌条を走る

あずさ5号に近づく信濃大町に山岳博物館の扉の待てり

山岳博物館エゾハルゼミのしきり鳴き砂礫の花壇に駒草の咲く

松本の市内歩き住宅の車庫に鎮まるラングラー楽し

## もとむらしげと

授業

・そ

## 山本孟

八ツ刻

・大

夕食ののち教科書をあげつつ明日の授業の構想を練る

文章の論理をほぐし問い合わせを作る作業重ねて夜更けに至る

構想はなかなか立たず設問や板書のメモを幾枚も書く

わが声のみ響く授業の虚しさを避けむと大小問い合わせを繰りだす  
君の意見それでいいよと肯定し反論ありげなまなざし探す  
滲みくる焦りを抑え繰り返し思考をうながす問いを重ねる  
騒がしさを代償として心ひらく子らとありたし国語の授業

## 山下雅子 梅雨明け

・習

## 養学登志子 正装して

・凌

玉蜀黍枝豆いまが旬なれど嵩なす塵よ生きる証か  
体調の戻らば又と切れし声待てど待てども梅雨の明けたり  
友は逝き過去の大切をまた失う身軽になりつ生きる日々あり  
梅雨の庭を席捲したるあじさいのあまた大輪明かるむ夕べ  
銷雲の鱗いろどる夕あかねさながら花火か瞬間まぶし  
きじばとの声に目覚むるやすらかさ脳裡を去らぬウクライナの交  
水不足酷暑を恐れつつ聞けり六月二十七日つゆあけ

## 山野幸司 星

・沖

## 横田敏子 火傷

・福

冷たきと汝が言う声も一瞬に呑む流星に乗る星の王子は  
過去というきら星の物語波間に飲まる一瞬の泡  
目の前の子ども見つむる艶やかな朝の肌妬みし我が  
水滴つる田んぼのタニン生き生きと幼き稻をバリバリと食む  
繰り返す日常なれど良く眠り目覚めの朝戦時下になき  
降り注ぐ光身に浴ぶ辛烟草をしつかと握り引くなり  
日中は鳴さえいぬ畠の中草引き続くわが農作業

八ツ刻をテレビも点けず卯ゆでドリップコーヒー妻の好みの  
マテバサイ新緑繁る散歩道勤めに励み子を育てた道  
未来ある者らスマホで遊ぶ今同じ車内で読む『歎異抄』

眼帯の内で見えない目の玉がぐるぐる動く死貌に遠く  
ゴミと見え手を近づければ動き出す紙魚は動いて殺されたのだった  
スイーツに酸っぱいいちごあるごとく和宏・裕子の青春日記  
満州で生まれた冷たさを知る登紀子荒波の海知床を歌う

モディリアー二戦禍の惨状見えぬよう美女のひとみを消してしまった  
かつてパリがウクライナのよに焼かれた日逃げまとっていたモディリアー二も  
青田風鶯はいよいよ白きわめ立ち去るでもなし点点と立つ  
山山はさみどり深しゆつたりと羽薄きてゆく一羽の白鶯  
よく見ればエレキのよう足使い浅瀬の小鷺小魚飲みこむ  
いつ年の年か植えたおぼえのある花が寝すぎてましたと出で来て咲けり  
ベートーベン五番の演奏正装して戦火はすぐそばに来ていても  
大雨の映像覗つつ願う日々その半分を分けて欲しきと

# 吉永惟昭 文の東

・熊

# 梅本武義 日本の大地

・羊

・羊

悔い残す女のことのみ浮かびくる予報は雨後曇後雨  
終活と言うにはあらず残し置き古き手紙の束も焼きなん  
わがさ庭落葉も焚けぬ令の域これらを如何に処置せん  
考えもまとまらぬまま拾い眺む文名残り惜しこが宝かも  
次々に扉こじ開けくだらない夢を誘いく文の若さよ  
何時しかに片付け利かぬ文括がり元に納まるところを知らず  
新聞の裏面に見ゆる「計画が進まなくなる」今日の運勢

磯田ひさ子

夏の庭

・森

草々の茂る梅雨明けくれなるのフランネル草群れず一本  
茎も葉も白きにこ毛に覆はれてフランネル草草々に呀ゆ  
頂にくれなるの花一つ付けフランネル草辺りを払ふ  
草丈の伸びるにまかし夏の庭おいらん草がむかしを運ぶ  
弁慶縄のネルの寝間着のやはらかさ育まれしよ生きわれは  
不忍池を水田に変へしとふ生きのびるための戦中戦後  
不忍池に逆の花ひしめける令和四年のおろそかならず

市原やよひ

つばめ

・萬

待ち受けのあじさい青く瑞瑞し庭のあじさい猛暑に負けて  
六月に輝き見せぬあじさいにせめて雨降れ猛暑を消して  
つばめ来ぬ今年の玄関寂しかり壊れしままの巣も残り居て  
つばめにも上手と下手があると知る巣作り上手姿を見せぬ  
聞き馴れぬ言葉を医師が口にする又一つ増えゆく不安  
幾度も頭を過る医師の声介護タクシー待つ間にも  
球場前ユニホーム姿の孫の顔相一杯のエールを送る

大浪美雪 楽しみ

・森

蒸しあげし新玉葱の蒸し汁は初夏の気に満つ鶴色をなす  
コロナ禍に子らの集へぬ連休の初日に受け取るケラと原稿  
一年中休みの吾にも連休は何か楽しめ校正も良し  
たけのこは古傷疼くと聞きをれどこはんに煮物初夏の定番  
肌寒き五月の溝に牛蛙まなこ光らせ跡りをり  
こはれもの、なまもの、下積み嚴禁と隙なく貼られ枇杷の届きぬ  
爪先の上がらぬ歩みに気付きたり舗装道路に凸凹の多きを

奥田陽子

馬鈴薯の花

・羊

今年また馬鈴薯の花咲き初めぬ去年と同じきちいさき畑に  
むらさきと白一面に馬鈴薯の花咲きいたりき遠き日ならず  
薔薇の手入れなし見る姿見たるより幾日を経ぬに崩されぬ  
代替りの土地ひろびろと整えばはやも建ちゆく同型の家  
馬鈴薯の花もかすかに揺れいか建築資材のあまた運ばれ  
かどの空地よさりゆかんと足もとの花ちさきこと空高きこと  
裝いを解かれしりぞきゆく緑丘より見えて時過ぎ去りぬ